

明治初期におけるフランス文学の移入

澤 護

日本におけるフランス文学は、いくつかの時期にわけられるが、本稿は明治20年以前の混沌とした時期のフランス翻訳文学の概観を眺めようとするものである。

これまでも、この時期の翻訳文学を論じた論文やフランス文学の翻訳目録・年表などの記述もみられるが、中には刊行されなかったと思われる作品までも紹介しているものさえある。今回はできる限り自分の手で原本を確認し、その過程で気が付いた若干の事柄を論じてみたい。

(一)

日本における西洋文学の翻訳は決して明治に始まるものではないが、明治期における純粹の翻訳小説は明治10年まで刊行されていない。明治11年に、次の三訳書が相次いで出版された。

仏 ジュール・ヴェルヌ著『新説八十日間世界一周』(前編) 川島忠之助訳

英 ロード・リットン著『歐洲奇事花柳春話』 丹羽純一郎訳

和蘭 ジオス・コリデス著『新未来記』 近藤眞琴訳

仏、英、オランダ語から各1冊ずつ訳されたわけだが、近藤眞琴の訳は明治元年のもので、「原書ハ『紀元二千六十五年』ト題シ又『未来ノ瞥見』ト云フ、和蘭ノ博士『ジオスコリデス』ノ著ト記ス」と『新未来記』の例言にある。訳書としては最も古いことになるが、発刊は明治11年であった。なお、オランダ語からの翻訳文学は、この書が最後だったと考えられ

る。幕末の海外文芸書は、当時習得を赦されていた唯一の外国語であったオランダ語から訳されたものであったが、イギリスとフランスの勢力が日本で強くなるにつれ、自然と英・仏語を学ぶ者が多くなり、翻訳の世界でもそれが如実に現われてきた。この点については、文部省雇いの外国人国別人数や海外留学生の留学先を調べてみるとよくわかる¹⁾。

明治元年より明治10年までの間、官学の最高の教育機関であった開成学校・大学南校や東京外国語学校で教えたお雇いフランス人は28名を数えたが、彼らはまずフランス語そのものを教え、次いで物理学や法学を教えていった。したがって、文学の世界よりも法学や行政法といった著作の方が早く紹介され、明治10年以前に『佛国刑法畧論』『佛国民法覆義』『佛国刑法注解』などが訳されている。「詩を作るより田を作れ」といった風潮の明治10年以前にあっては、とても文学が胎生する土壌は日本になかったのである。

明治10年代に入ると、社会・政治情勢が多少なりとも安定し、それにつれ文明開化本や商売往来本が数多く刊行され、さらに西欧紹介の書も多く発刊されるようになっていった。

十年の役を境に、一般の日本人になんとか文学を味わうだけの余裕が生れてきたのだが、今度は猛烈な勢いで西洋崇拜の熱が日本全国を覆いだした。明治10年頃の日本文学は、合巻物にしる滑稽本にしる創意工夫のないものであったが、文明開化は文学の世界までも変貌させてしまった。

東京で発行される新聞・雑誌が数日の内に全国に配達される郵便網の確立は、地方差をなくしていたが、たちまちの内に全国に広まった文明開化の熱が求めるものは一体なんだったのか。こういった社会が求める文学がどのようなものであったか、これらは容易に想像ができる。古い伝統を破壊し、新しい光を求めようとしても、文学の世界では一朝にして新文学が生まれるわけではなく、この間隙を埋めるため西洋の文学に救いを求めた。明治10年より20年にかけて、日本では翻訳文学の全盛期を迎えたが、当

明治初期におけるフランス文学の移入

時の社会・政治情勢が翻訳文学に与えた影響も、これらの作品を分類してみると非常に強いものがあったことがよくわかる。

明治11年10月から12年4月にかけて出版された『^{欧洲}奇事花柳春話』(丹羽純一郎訳 ロード・リットン原著『アーネスト・マルトラヴァース』および『アリス』の抄訳)5冊は、西洋および西洋の風俗人情を知るには好都合の小説だったことから、世間で大歓迎され爆発的な人気を博した。この後の翻訳作品は、『花柳』、『春』、『春話』といった題名のついた作品がかなり出版されたが、こういった題をつけなければ売れなかったのだから、丹羽の『花柳春話』の与えた影響は極めて大きかった。

この明治11年に、丹羽純一郎は芝にあった大手の書肆・山中市兵衛の所より『^{英国}龍動新繁昌記』(五編)と『^{佛国}巴里斯新繁昌記』を刊行している。これらは題名からわかるように文学書ではなく、西洋の事情を紹介した読物だが、こういった新しい読物を世間が渴望していたわけである。なお、『^{佛国}巴里斯新繁昌記』は続編も発行する予定もあったらしいが、実際には初編しか出版されなかったと思われる。

こういった西洋紹介の書、『^{ナポレオン}拿破倫詳伝』(曾谷成訳)や『西国立志編列伝』(橋爪貫一訳)といった伝記物が明治14年までに発刊されたが、明治15年になると翻訳作品も自由民権思想と結びつき、政治小説の翻訳物が多くなっていった。この点は、翻訳文学全体をみなくとも、フランス文学だけを取り上げてみてもよく理解できる。以下、年代ごとに訳述されたフランス文学から若干の傾向を探ることにする。

(二)

明治11年6月、川島忠之助²⁾がヴェルヌの『八十日間世界一周』(Le Tour du monde en quatre vingts jours)を『^{新説}八十日間世界一周(前編)』として、日本では初めてフランス語原典訳をした。この原典訳の前

編は、翻訳文学の世界に新しい転機をもたらせた『花柳春話』より四ヵ月も早く、翻訳文学史上注目される訳業となっている。ヴェルヌの翻訳物は後年続々と刊行されることになるが、そのほとんどが英語からの重訳であり、フランス語からの訳本はこの書をもって嚆矢とする。川島の訳は逐語訳であるが、一部後に紹介するように、原文の意味を十分に把握した格調の高い訳となっている。ただ、後編の一部には原文を離れ、英訳本を参照した個所がみられる。

明治9年、日本政府はイタリアに蚕種紙の売り込みを図り、使節団を派遣することにした。この時、渋沢栄一より川島忠之助に対して通訳として訪伊の話があり、これに応じた川島は明治9年11月26日横浜港よりサン・フランシスコを經由してヨーロッパへ向った³⁾。この旅の途中、英訳の『八十日間世界一周』(Around the World in Eighty days)を買求め、旅の慰めとしたが、この書のアメリカの部分に、彼がかつて読んだ原本にはない増補がしてあることに気付き関心を覚えた。

明治10年7月16日⁴⁾、川島はナポリより乗船し、途中の香港で船を乗り換え帰国した。帰国してまもなく、彼はこの書の翻訳にとりかかり、明治11年6月、『新説八十日間世界一周』(前編)が自費で刊行された。翻訳小説がなかった当時、どの程度の部数が売れるのか見当もつかない有様では、出版を引き受けてくれる書肆もなかったであろう。それでも、明治11年6月の新聞に、丸屋善七、(甘泉堂) 山市兵衛、慶応義塾出版社の名をもって次のような広告が掲載され、これら三書肆が発売元となった。

「川島忠之助譯 新説八十日間世界一周 右ハ佛国著名の文士ジュール
ヴェルヌ氏の原著にして環地列国の地理風俗を閑雅なる一編の稗史に綴
りし珍書たるを以て一読観娛稗益共に饒きを知るべし冀ハ江湖の君子譯
文の拙劣原文の麗筆を転じて泥となせし所あるを嫌わず一本を求て高覽
を賜らんとを」⁵⁾

川島訳の『^新説八十日間世界一周』(前編)には、序文もあとがきも全くなく、また、ヴェルヌの紹介記事もなく、川島がヴェルヌについては全く関心がなかったことを窺がわせる。

明治13年6月、この書の後編が発行された。奥付をみると、「翻訳出版人 川島忠之助、発閲所 丸家善七、山市兵衛、慶應義塾出版社」とあって、前編の奥付と変わるところがない。したがって、後編も自費出版と思われそうだが、後編は慶應義塾出版社が出版元となり、当時のいろいろの新聞に発売広告を出し、東京ばかりでなく大阪の新聞にも広告を掲載し、大宣伝に努めた⁶⁾。この広告は明治14年になっても盛んに新聞に掲載されているので、相当の部数が発行されたと考えられる。

後編が刊行された明治13年には、明治11年刊の前編はほとんど在庫がなく、明治13年8月3日より前編を再版して発売することになった。川島は後に、「二冊合して前後二百六七十円の収入があった⁷⁾」と語っているのから考えると、およそ3千部が売れたと思われる。前編が1冊40銭、後編が1冊50銭であったから、印税を1割とすれば3千部という部数が単純に計算できる。明治20年代においてさえ、1千部を売り尽すことはなかなか難しく、さらに、明治10年前の絵入り本に慣らされてきた日本人が、絵も図版もない活字だけの『^新説八十日間世界一周』を3千部も消化したのは驚異的だったと言ってよい。

明治10年代の西欧に追いつき、追い越せの思想が拡大していった時期に、たまたまヴェルヌのこの小説——科学万能の思想が底流となった科学・未来小説——の中に、これからの自分たちの姿を見出したこともあったであろう。しかし、この翻訳が非常によく売れたのは、川島が意図した社会啓蒙のためより、むしろ原書の内容の想像豊かな物語にあったと考えた方が自然であろう。

今から100年前の1870年代のある日、友人との賭から80日間で世界一

周をしようと企て、その旅に出るところから始まる話の筋は、もう内容の突飛さと意外性を予期させる。旅の途中で遭遇するさまざまな事件、訪れた国をいろいろと紹介しては読者に教える未知の国の文化や風俗・習慣、異教の世界、2千トン級の大型の外輪船、どれをとっても日本人の読者にとってはもの珍らしく、斬新に思えたはずである。我が国最初の翻訳小説を読むとって触した読者がいたはずもなく、内容の波乱万丈さが読者に受けたとってても過言ではない。

手元にあるフランス郵船、ペニンシュラ・オリエンタル郵船会社、パシフィック郵船会社、オキシデンタル・オリエンタル郵船会社などの船の運行表とを検討しながら、ヴェルヌのこの作品の行程をたどってみると、おもしろく分析できるが、この点については稿を改めることにする。香港・横浜間、横浜・桑港間の船の日程などは、手元の資料とヴェルヌの記述はかなり一致するところがあるので、ヴェルヌ自身がこれら船会社の運行予定表を入手し、それを机上に並べて世界一周の計算をして筋を組み立てていったことがわかる。このへんが、今なお古さを感じさせない作品としているのである。

『八十日間世界一周』には、三章ほどに渡って横浜や江戸を描写する条がある。一度も来日したことがないヴェルヌが、異国趣味にかられて、脳裏に浮んだ架空の事柄を記述したにしてはできすぎている。間違いなく、幕末から明治初年にかけて来日した旅行者か宣教師の書いた「日本見聞録」とか「描かれた日本」といった類の日本紹介の本を参照しているはずだが、それがなんであるのか解決できずにいる。この作品は1873年（明治6年）に発行されたが、小説中に日本を描いた最も古い作品として注目しておいてもいいであろう。

19世紀中頃、日本の木版画を契機として、フランスで文芸の新運動が始まり、マネ、モネ、デュレー、ゴッホ、ゴーガンといった画家が版画の技法を範として、印象派の理論を正当化していった。それより少し遅れ

明治初期におけるフランス文学の移入

て、ゴンクール、モーパッサン、ユイスマン、プルーストといった作家が日本美術を文学に取り入れ、パリでは日本趣味が大いにとりざたされるようになった。これには、1865年からのフランスと日本とを結ぶフランス郵船の定期航路の開設、1867年のパリ万国博覧会への日本の参加が伏線にある。

第2代駐日フランス公使レオン・ロッシュが、フランス郵船を上海より日本まで延長させようと躍起になったのは、日本の蚕に目をつけてのことであったが、蚕ばかりでなく、漆器、陶器、銅貨銭、茶なども多く輸出されていった。これらの梱包や蚕の包み紙に、日本の奇妙な遠近法、均衡を破った構図の版画が利用されたはずであるから、これが彼らの目につかなかったわけではない。

幕府と薩摩藩とがお互に競って出品した1867年のパリ万国博の出品には、「北斎漫画」「北斎畫譜」「名所図絵」といった書籍が数多く含まれ、500枚単位で20数点の錦絵も同時に出品された。この万国博の日本館を再三訪ねては新しい衝撃を受けて、後に『北斎』『歌麿』の名著を刊行したゴンクール、商人・清水卯三郎が出店した日本茶屋の三人の芸者に注目したメリメなど例にあげるまでもなく、1865年から1895年にかけての30年間は、パリで日本趣味熱の高揚した時期であった。'このような折に、ヴェルヌが未知の神秘を求め、日本を知ろうとしたとしても別に不思議なことではない。

ヴェルヌの横浜の描写は、次のようにはじまるが、これを明治13年6月刊の川島忠之助訳から引用してみる。

「十三日（筆者注 1872年11月13日。実際には、この日に香港より横浜に入港した船はない。）暁天ノ高潮ニ乗シテ郵船ハ滞ル事ナク横濱港へ着セリ。抑モ此港ハ北米洲ヨリ太平洋ヲ踰エテ支那、日本、呂宋ノ地方へ往来スル船舶ノ寄港ズル處ナレバ実ニ要衝ノ地ナリ。其位置ハ

日本帝國第二ノ首府ナル江戸ヲ距ル事遠カラズ、其海灣ニ臨ンデ新タニ設ケタル開市場ナリ。江戸府ハ昔時會テ將軍ノ居城ニシテ萬機ノ首府ナレバ、神孫帝子ノ居地京都ト繁盛ヲ頌頌スル廣大ノ一都府ナリ。

「カルナチック」(筆者注 船名)ハ横濱税関ノ波止場ニ近キ錨ヲ萬國ノ船舶羅列スル間ニ投ジケレバ、パスパルツー(筆者注 主人公の従僕名だが、フランス語ではどこへでも行ける者といった意にもなる)モ己ヲ得ズ上陸スレド身ハ香港以來爲ス事毎ニ鷓ノ嘴ト喰ヒ違ヒケレバ心中快々トシテ樂マズ。行末ヲ考フレバ何ンゾ珍奇ニ富ム旭日國ニ来ルトモ喜ブニ違アラン。是ヨリ、別ニ目的モナク只市中ヲ足ニ任セテ徘徊セリ⁸⁾。」(句読点は筆者)。

このあたりの描写は、作者ヴェルヌの頭の中で組み立てられる。しかし、英、米、オランダ、中国人の家並みが続く界限や、日本人の街である「此辺ハ邦人ノ尊信スルー神女ノ名ヲ取テ辨天ト稱セリ。路傍ニ奇異ナル構造ノ神門アリ。入りテ見レバ、老杉古松道ヲ狹ンデ生シー虹ノ板橋竹林ニ沿ウテ架レリ。(一部略)是ヨリ、市街ノ方へ至レバ、数個ノ兒童群遊スルアリ。其容顔ハ淡紅ヲ帶ビ、両頬ハ殊ニ赤シ⁹⁾」あたりを読むと、ヴェルヌがなにかの記録か著作を参考にしたことを感じさせる。この点は、いづれ解決したいことのひとつである。

ところで、先に極く一部を引用した川島の訳文だが、原文に忠実で、多少の硬さはあるがなかなかの名文であり、川島の文の冴を感じさせる。この同じ個所を、明治13年から明治22年にかけて数多くの翻訳をし、名声を轟かせた井上勤の訳で紹介してみる。井上訳のヴェルヌものは非常に多く、それらの翻訳名は末尾の表を参照願いたい。井上訳のヴェルヌものは英語からの重訳であり、井上は長い間ヴェルヌを英国人と思い込んでいたようである。

明治初期におけるフランス文学の移入

「十三日「カルナチック」号は滞ることなく、未明の高潮に乗じて横浜港に着し、横浜税関に近き波止場の近傍にて萬国の船船が輻湊したる間に錨を卸しければ、^{バッセバルツ}潑世巴兒通（筆者注 主人公の従僕名）も已を得ず上陸すれど、香港以来為す事毎に過失のみなれば、風景を見るの心もなく、心中快々として楽まざるものから、別に目的もなく只足に任せて市中を徘徊せり。¹⁰⁾」

「通俗」と名をうってはいるが、かなりの分量を訳述していないのが容易にわかる。読者に読み易いように、すべての漢字にルビをつけ、一般の関心が湧かなそうな個所は飛ばしてしまう翻訳書は決して珍しいわけではない。いや、むしろ原本の意を汲んだ自由訳の方が遙かにこの当時は多かったのである。この点、川島の忠実な逐語訳は大いに評価されてよい。明治13、14年にかけて数千部の川島の訳本が売れたのであるから、すぐにでも2冊目のヴェルヌの著を翻訳に取りかゝれたはずであるが、なぜか川島は1冊のヴェルヌの著を訳述したに終わっている。明治10年代にあって、川島は居留地8番の「ヘフト・リリアンタール商会」の番頭をしていたので、彼にその意志があれば、ヴェルヌの著作を手にする機会があったはずである。

明治3年5月、横浜で日本では初めてのフランス語新聞がフランス人・レヴィの手によって発行された。この新聞社はフランス図書の輸入にも力を入れ、新着図書が入荷するとすぐ自社の新聞に広告をだし、居留地に住む人たちの便をはかっていた。また、ここに入荷した図書は、居留地28番にあった書店「ケリー商会」でも取り扱われたことも多く、これらの広告中に、ヴェルヌやドーデ、さらにユゴーの著書がみられる¹¹⁾。川島のいた8番と28番は、道を一本はさんだ隣家であっただけに、彼がこれらの新着図書をみる機会が極めて多かったはずである。ところが、川島はポール・ヴェルニエの『虚無党退治奇談』（Chasse aux Nihiristes）を脱稿

し、明治15年9月の出版前の5月7日に横浜正金銀行のリヨン出張員として渡仏し、永い間日本を留守にしてしまった。この本は虚無党が皇帝を弑殺しようと企て、スパイが暗躍する、いわば活劇調の内容のもので、読みだしたら止められないと広告されたものであったが、あまり売れ行きはよくなかった。1冊75銭という定価が響いたのかもしれない。

いずれにしろ、川島訳の『八十日間世界一周』が売れたことにより、明治13年以降日本の小説類の不振をよそに、ヴェルヌの作品がつぎつぎと刊行され、ヴェルヌもののブームが続いた。ヴェルヌの翻訳物は明治21年までかなりの点数が刊行されていたが、明治22年を境に次第に下火になり、デュマ、ユゴーらの翻訳物に変わっていった。それでも、ヴェルヌの翻訳点数は、シェクスピアのそれに匹敵するぐらい多く、明治10年代の日本人の心をくすぐるものが、そこにあったのが知れ興味深い。なお、井上、太平三次、三木貞一らの翻訳は英語からの重訳で、その扉には「英国 ジュールス ヴェルヌ氏原著」とあるように、原著者やその国籍には全く関心を払っていない。

表に掲げた書の1冊1冊をこと細かに記録すれば、それなりにおもしろい事柄にぶつかるのではあるが、紙面の都合でそのひとつ、ふたつを記録するにとどめる。

井上勤訳『^{九十七時}_{二十分間}月世界旅行』は、明治13年3月から同14年3月にかけて、1冊12銭の小冊で10冊に分割して大阪・二書楼より刊行された。この二書楼とは三木美記と黒瀬勉二のふたりの経営者からつけた名か、三木書樓と書籍会社の合せた名なのか不明だが、この書の奥付をみると第1分冊より第5分冊までは、出版人に三木と黒瀬の名がみられる。ところが、第6分冊よりの出版人名は三木美紀ひとりになっている。また、明治13年7月の新聞には、次のような広告がなされている。

「米國ジュールス、ベルン氏著

明治初期におけるフランス文学の移入

此書ハ米國砲銃会社に於て月の世界に旅行する古今未曾有の新発明にて一回ハ一回より驚愕する話にて且學術上其益少なからず

三木書樓 書籍会社¹³⁾

僅かこれだけの記録から全てを判断するのは危険を伴うが、黒瀬が三書樓より手を引いたために三木書樓と書店名が変わったようにも思える。この10分冊は、明治19年9月に合本で刊行されることになるが、この出版人は三木佐助となっている。佐助は美紀の子息か、改名したものか、といった事柄は個人的には大いに興味があるのだが、文学とは遠ざかってしまう。また、この19年の合本は定価が1円30銭と高かったのだが、60銭の特価で発売当初には売られた。なぜ、同じ本でありながら、このように値段に変化があったのかは、当時の出版事情による。

後述する事項に関連があるので、この点を簡単に記述してみたい。とりわけ、明治16年頃より20年頃にかけて翻訳文学の全盛期を迎えたが、これら翻訳文学は多く予約出版の形式がとられた。例えば、明治19年4月に出版されたヴェルヌの『亜非利加内地
三十五日間空中旅行』の定価は1円70銭であったが、予約締切前に申し込みをすれば半額の85銭で購入することができた。出版社としては、予約部数に若干冊を上のをせして印刷すればよく、出版はしたが売れずに倒産という悲劇はこれで完全に避けられたわけである。また、盛んに広告をしたものの予約部数が少なかった場合は、予約は反古にして出版しなかったのであるから、なんとも優雅な出版稼業ではあった。その代わりに、予約価と定価に大きな差をつけ、予約者の好意に答えたとも言えよう。したがって、出版御届けをし、出版免許を受け、それが版權目録や新聞広告に掲載されたからといって、そのまま出版に連なるとは限らないのである。表で「未刊か」と記述しておいたのは、このような図書を含んでいる。さらに、同書名の作品が出版社を変えて刊行されたりしているが、これは版權譲受があったわけで、この縦の調査も本の好

きな者にとっては調べだしたら止められない楽しみがある。

明治10年代はもちろん明治20年代においても、訳書の題名をみただけでは、その原書の題名が全くわからないものが極めて多い。これは、フランス文学ばかりでなく、イギリス、ドイツ、イタリア文学でも同様に、訳題で驚ろかせて売ろうとする奇を衒ったものも多く、当時の風潮の一端を覗かせている。

明治20年に刊行された『五日英雄之肝膽』、『寸断美人之腸』はいずれもユゴーの作で、前者は『ある罪人の物語』で、後者は『レ・ミゼラブル』である。原書の題名がこのような訳題になっているのから推察し、原文とはかけ離れた訳になっているのではないかと容易に思わせる。事実、この頃の訳で逐語訳は珍しく、原本と対照してみると、加筆はざら、一部の訳のみも珍しくなく、原文との距たりは想像以上のものがある。これが当時の要求に合致した翻訳の実体だったのである。

(三)

翻訳動機にはいろいろあるが、明治10年代の翻訳目録の表にフェヌロンの名がみられる。フェヌロンの訳は数が少ないが、明治21年に『フェーブル』を加藤幹男が『警世奇話』として訳し、明治24年に同じものが『心の楽』として同じ出版社より改題して刊行された。この後の訳書にフェヌロンの名がみあたらないので、明治期におけるフェヌロンの訳述書は刊否不明のものをも加えて僅か5点しかない。

フランス文学の訳述書を年代順に眺めてみると、まず第一にフェヌロンの作品をあげなくてはならない。明治11年に長澤正毅が「へねろむ物語」を渡辺温の元より刊行したようであるが、これは今日1冊も存在していない。版元の渡辺温（知新）は牛込白銀町に住まい、明治6年から8年にかけて『通俗伊蘇普物語』（6巻）を刊行したり、他の訳書の閲をした人物であ

るが、原本が残されてなくては記述のしようもなく、またフェヌロンのどの著作の訳であるのかも全く不明である。結論を先にいえば、この訳書は著作権免許を受けたものの、刊行にまでは至らなかったと判断したい。当時の最大の宣伝媒介は新聞広告であったが、明治11年代の『東京日々新聞』『郵便報知新聞』などを調査してみたが、ついにこの広告を見いだすことができなかった。したがって、この作品をフェヌロンの最初の訳述書とみなすわけにはいかない。

明治12年5月、フェヌロンの『テレマック冒険譚』を、宮島春松が『歐洲小説哲烈禍福譚』と訳して神田の太盛堂より刊行した。宮島春松は、五稜郭を築いた兵学者・武田斐三郎の元で英・仏語を学び、また当時の唯一の官学の教育機関であった開成学校で仏語を学んでいたもので、仏学から訳述したものと考えられる。

この第1巻は、假名垣魯文閲、三浦義方校、鮮齋永濯画となっていて、版元でも相当の熱を入れての刊行だったことを窺がわせる。この書の緒言を読むと全36冊をもって完結するはずになっていたが、実際には第8巻までしか刊行されていない。第6巻は明治12年11月刊、第7巻は明治13年1月刊、第8巻は明治13年6月刊と次第に発行期間が延びている。第1巻より第8巻までの装丁は、この頃に出まわってきた洋装本ではなく、旧来の和綴本で、活字も木版活字を使用している。このへんが古くさいと読者に敬遠されたものか、巻8までで未完に終わったのは惜しまれる。なお、これらの本は今日では相当の稀本になっているだけに、売れ行きの方も芳しいものではなかったようである。

それにしても、宮島春松の訳は馬琴調の七五五七調の逐語訳で、その流麗な筆致は見事なものがある。この当時の訳述書としては、まず一級の美文である。逐語訳に若干の文飾を加えたこの訳文が、多少なりとも気になるという読者には、同じ「テレマック」を訳した伊澤信三郎の『経世指針鉄烈奇談』に好感が持てるはずである。

明治 16 年 12 月、森重遠校閲・出版の『^{経世}指針鉄烈奇談』が丸善より予約出版された。その新聞広告には次のようにある。

『鉄烈奇談』1～5 編 1 冊 65 銭

……佛王ルイ十四世ノ皇孫ヲ啓発輔導センガ爲メニ出タルナレバ之ヲ少年輩ニ読マシムレバ其裨益実ニ少カラストス故ニ今邦語ニ譯シテ以テ世ニ公ニス……

丸善書舗敬白¹⁴⁾

この広告が出された 3 ヶ月後の明治 16 年 12 月に、「テレマック」の第 1 編より第 5 編までを訳したものが 1 冊にまとめられて発行された。「第 6 編以下近刻¹⁵⁾」とか「……全篇譯既ニ稿ヲ脱シ順次出版セラル、¹⁶⁾」との広告もみられるが、6 編以降の出版はなされなかったらしく、原本も存在しなく、また新聞広告もない。

伊澤信三郎訳の『^{経世}指針鉄烈奇談』は、明治初期の翻訳文学史上に極めて重要な楔を打ち込んだ。それは、従来の翻訳が内容のみに重きをおいてきた自由訳に批判を加え、原文に従って訳すことを主張した翻訳態度の宣言であったからである。

「此書(筆者注「テレマック」)文章の絶妙なるハ彼邦伝へて文林の規範となすよしなれども彼我言語文章の異なる假令直譯するも能く其妙を写し得べきにあらず是譯者の嘆息するところにして苦心も亦極れり故に原文に従って譯し去り務めて作者意匠の密なるを害せざらんとすれば譯者も亦删除に失せんよりは寧しろ重複に失せんとするの思ひあり故に文章往々渾融を欠き語氣重複を免かれざるものありて看官諸君の思想を煩はさんを恐る……¹⁷⁾」

翻訳文学は原文に従って忠実に記述しなければならないとした伊澤信三郎の言葉は、明治16年の言だけに極めて斬新なものではあったが、世間の翻訳文学は相変わらず自由訳が続き、明治16年を境に翻訳態度が一変するまでには至らなかった。

フェヌロンの『テレマック冒険譚』は、1699年にルイ14世の孫で王位継承者のブルゴーニュ公の教育のために書かれた教育小説であった。傲慢で気の荒い王子の性格を直したフェヌロンは、このためカンブレの大司教の地位を国王より贈られることになったが、宮島春松や伊澤信三郎が200年も前のこの作品をどのようにして知りえたのであろうか。明治10年以前の輸入図書目録を捜してみたが、フェヌロンの名前はみあたらない。意外に単純なところに、翻訳動機があったような気がしてならない。

宮島春松は開成学校、伊澤信三郎は東京外国語学校の生徒であった。この学生時代に、文部省に備用されていたフランス人教師が、たまたま「テレマック」を仏語の教科書に使用し、それに関心を持って翻訳にとりかかった可能性が極めて強い。この当時の開成学校や東京外国語学校で使用していた教科書一覧といったものは確認されていないが、開成学校の流れをくむ東京大学で、間違いなく「テレマック」が使用されたと思われる節がある。

明治13年、東京大学文学部の第2年次にデカルト、ヘーゲル、スペンサーの近世哲学史が教えられており、デカルトでは『方法叙説』と『メディテーション』(Méditations métaphysiques)がテキストに使用された。また、東京大学法学部のフランス語を学ぶ学生のために、教科書・参考書として、「ヴルテール氏著『路易十四世紀』(Siècle de Louis XIV)、ヘロン氏著『テレマック慢遊記』(Les Aventures de Télémaque)¹⁸⁾」などが記載されている。明治13年は東京大学にはお雇いフランス人教師はひとりもいなくなった年であるだけに、これらの教科書類はそれ以前にいたフ

ランス人教師が使用していたものを、そのまま踏襲して記載したものと判断される。

宮島にしろ伊澤にしろ、学生時代に使用した教科書が、時代の流れと共にそれが啓蒙書となり、また当時の政治風潮に合致した作品となると看做したところに翻訳動機があったと考えられる。

明治12年5月、山田保抄訳の「佛國有名なる滑稽家ポールドコック氏の原著を譯¹⁹⁾」した『西洋滑稽三笑人』という69頁の小冊が山田保自身の手で出版された。この書は、明治17年6月に表紙の装丁を変えて、早川新三郎によって再版されているが、原著者と原題は未だ調査ができていない。丸善や和泉屋が発兌所となり、25銭の定価で発売した初版の緒言には「此書は佛蘭西にて開板したる滑稽借家の奇談を訳した者にして」とあるので、フランス人のポールドコックなる人物の作品であったのだろうが、内容を読んでみてもよくわからない。

明治13年に刊行された前田正名の『日本美談』は翻訳というべきかどうか問題がないわけではないが、若干記述しておきたい。前田正名は、前田正毅や高橋新吉と共に幕末時に「和英辞典」を編纂し、それを売って利益をあげ、海外留学の費用を捻出しようと考えついた人物である。彼らは、明治2年に『改正増補和訳英辞典』を刊行し、初志を貫ぬいたが、この辞典は辞典研究者の間では「薩摩辞書」と呼称されている。

その前田正名が仏国にあって、日本の風俗を紹介しようとして赤穂浪士・大石良雄、忠臣蔵をフランス語に訳し、「巴里の劇場ニマチ子、アンテルナショナルニ座に於て興行せしめ大に全都人士の喝采を得欧州諸国の好評を受けし有名なる訳本²⁰⁾」である。つまり、前田正名が忠臣蔵をフランス語に訳し、フランスで好評だったこともあって、それをまた日本語に訳して須原屋茂兵衛などの書肆から発売したものである。なお、このフランス語訳の際には、ゴーチェが手を入れたという。

(四)

明治15年から翻訳文学の世界は大きな変貌をとげ、西欧小説も政治的色彩の強いものが翻訳・紹介されるようになった。自由民権運動の嵐が、容赦なく文学界を襲った年である。これは、この年に創刊された自由党の新聞が導火線となり、西欧政治小説の続き物が新聞に連載され、続き物の流行をみた。フランス人作者としては、デュマとユゴーが登場する。

明治15年6月25日、「自由新聞」が創刊され、この創刊号から百華園主人のペン・ネームで桜田百衛が、デュマの『一医師の回想』を「西の洋血潮の暴風」と題して訳述した。デュマのこの作品は決して政治小説といったものではないが、桜田はこの作品を巧みに土台として利用し、立派な自由民権の教科書としてしまっている。桜田ばかりでなく、これから述べる新聞の連載小説は全て自分たちに都合のよいところを強調し、勝手に増補刪削をした「豪傑訳」である。「西の洋血潮の暴風」は「自由新聞」の明治15年7月26日号まで連載され、この号に「以下次号」とあるものの、その後の新聞紙上には掲載されなかった。おそらく官憲の目が光ったのであろう。この当時の政党系の新聞は、治安妨害といった事由により、内務卿より発禁の憂き目を見ることがよくあり、出版物に対する弾圧には厳しいものがあつた。一時中断となつた「西の洋血潮の暴風」は、こんどは絵入自由出版社より『佛國革命起源西洋血潮小暴風』として明治15年12月に刊行されたが、これも第1編だけで発禁となつた。なお、桜田百衛は明治16年1月18日に逝去したので、彼の豪傑訳はこれひとつに終つた。

「西の洋血潮の暴風」が、「自由新聞」紙上から姿を消すとすぐ、同紙に夢柳狂士（宮崎夢柳・宮崎富要）が8月12日より12月24日にわたつて「自由の凱歌」を87回連載した。「自由の凱歌」は、やはりデュマの作品で『バステューユの奪取』という題名であつたが、宮崎はこの作品を英語から重訳した。「自由新聞」に掲載中、この第1回より第20回までを

1冊の本にまとめ、その初編が10月に発行され、さらに第2編が12月に刊行されたが、第3編は刊行されずに終わった。

「自由新聞」には明治17年7月9日より同12月12日にわたって、紫瀾漁長（坂崎紫瀾・坂崎斌）がユゴーのフランス革命を描いた『九十三年』を「修羅の衢」と題して訳演している。特にこの記事中で特筆されることは、5回に渡って非常に詳しいユゴー伝を書き、ユゴーの顔写真まで掲載していることである。従来、なにかの作品を訳述する際に、その作家のひとりとなりを紹介することはまずなく、このユゴー伝は詳細であるだけに、かなりの資料が集められ記載されたことがわかる。

明治15年11月11日、板垣退助は後藤象二郎らと共に香港を經由して欧州へ旅だった。この外遊は、自由党総理が数ヶ月の間日本を留守にするのはなに事かと、大変な騒動を持ち上らせたものであったが、板垣らは翌16年の初春にヴィクトル・ユゴーを訪ねた。この折、ユゴーは自分の作品を含め、フランスの政治小説を沢山入手し帰国することを勧めた。こうした進言によって、政治小説が買い集められ、明治16年6月22日に彼らは無事帰国した。板垣退助らと同行したひとりに「自由新聞」の記者でもあった栗原亮一がいたが、彼は帰国するとすぐ『板垣君欧米漫遊日記』を書き、「自由新聞」に「泰西紀遊 佛國の部」を連載し、さらにルソーの翻訳にとりかかった。この外遊の折に買い集められた作品のひとつが、先の「修羅の衢」やユゴー伝であったわけである。

「自由新聞」よりも少し早い明治15年2月1日に創刊された新聞に「日本立憲政党新聞」がある。この新聞も論説の「立憲政体ノ正解」が問題になったのか、その第14号より約1カ月半ほど内務卿の命により発行禁止となった。発禁解停後の明治15年11月5日号より約1カ月に渡って、「革命勇婦テレーズの伝」というフランスの史家・シャトリアンの作品が餘聞翻訳・掲載された。平和の慈仁と共和の大義を明らかにするという内容のものだが、このような政治に関わる作品が、この年から明治18年に

かけかなり訳述されている。

明治17年5月11日、板垣退助が紙上の緒言で祝辞を述べて創刊された「自由燈」には、先の「西洋血潮小暴風」の後半部が、「佛蘭西鮮血の花」と改題し、絵入り読物として4カ月以上に渡って連載された。さらに、翌18年11月18日は「自由燈」の紙幅を拡大した日だが、この日よりユゴーの『九十年』が「佛亂霜夜の月」として掲載されている。このような政治小説の掲載は東京で発行されていた新聞ばかりでなく、静岡の「函右日報」、高知の「土陽新聞」などにも共通してみられる。

新しく発刊された新聞や地方紙は、大新聞に対抗し、このような政治小説を連載で掲載し、自分たちの思想の宣伝・正当化に努め、さらに後日これらの翻訳を1冊の単行本として刊行していくという全く新しい翻訳文学の紹介を編みだした。西欧文学の「続き物」、その「続き物」の刊行は、この時代にみられる特異な出版であった。

明治20年以前の政治的な小説はユゴーよりデュマ父子の方が遙かに人気があったが、これはデュマ父の作品にはフランス大革命を中心に扱った材題が多かったことによるもので、明治15・16年頃の自由党系の勢力の強かった時に、そのあるものがこの大革命の人々に共鳴するものが大きかったからである。この点、ユゴーの思想にいまだ追従するところまでいっていない。

デュマの翻訳で最も早いものは、『四十五名の兵士』を『佛國五九節操史』として松岡亀雄が訳したもので、明治14年のことであった。明治14年2月の刊行であるから、それ以前に翻訳を手がけたわけで、松岡亀雄がなぜデュマに注目したのか、その動機を知りたいものだと思っている。また、この出版を引き受けた温故書堂・内藤伝右衛門は山梨にあった書肆だけに、この辺の詳細な事柄も追求してみたい。温故書堂は『経済小学家政要旨』とか『理財論』といった硬い出版をしていたところで、山梨では時流に遅れるとして、明治10年に日本橋に支店を出したほどであるので、

内藤伝右衛門が松岡亀雄に訳述を勧めたのかも知れない。しかし、この訳も3冊が出版されただけで、訳は未完のまま中断された。

(五)

明治10年代の翻訳文学を記述する上で大いに留意しなければならないことを指摘しておきたい。それは刊行年月日の問題である。具体的な例を掲げて検討することにする。

博文社から刊行された、ヴェルヌ著、井上勤訳の『月世界一周』の奥付に明治16年7月出版免許と印刷されている。この出版免許の年をとって、井上訳の『月世界一周』は明治16年に発行されたと記述した論文や紹介記事がある。しかし、出版免許は出版日ではなく、あくまで出版願いをだし、それが許可された日で、発行は明治16年7月より後のことだったはずである。事実、この本の予約締切は翌17年5月15日で、その時の予約価は66銭（定価1円10銭）であった²¹⁾。しかし、この予約日は5月30日まで延期され、発刊は6月になった。6月5日付広告に「兼テ広告ノ通刻成ニ付是迄御入金之向ヘハ悉皆発送済²²⁾」と博文本社名のものが新聞に掲載されている。つまり、明治16年7月の出版免許より遅れることおよそ1年である。このような事例は他にもまだいくつもあるので、年月日に重きをおく研究者は、複数の資料や記録で確認する必要がある。

また、新聞広告や出版目録の類に本が紹介されたからといって、それが出版されたとは限らない場合もある。明治16年6月、板垣退助らと共に帰国した栗原亮一はルソーの作品を刊行しようとした。「魯曹自叙詳傳」がそれだが、この書は「栗原亮一訳 中江篤介閲 前編1冊約四百頁 予価1円（予約外ハ1円50銭²³⁾」で明治16年12月1日に書物出版社より出版されることになっていた。ところが、この明治16年11月10日に予約締切となっていたにもかかわらず、翌17年1月15日まで延期された。

しかし、この後の新聞広告には刊行案内は全くなく、出版までこぎつけなかったことを臭わせている。実際にこの題目の書を今日までだれひとりとして確認していないのであるから、まず未発行に終わったと判断するのが至当であろう。このような例は他にもまだ指適できるが、歴史的な事柄の調査は厳密でなければならない。

明治10年代のフランス翻訳文学は以上展望した通り、その刊行にはさまざまな動機があった。しかし、フランス文学が日本文学に浸透していくには、未だ時期尚早で、日本の自然主義文学の台頭にはさらに多くの年月を必要としたのであった。

- 注 1) 拙稿「日本におけるフランス語」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第16号)
- 2) 川島忠之助については、下記の論文に詳しい。
柳田泉「川島忠之助伝」(『明治初期翻訳文学の研究』 春秋社 昭和36年)。
川島順平「父・川島忠之助について」(『比較文学年誌』10号 昭和49年)。
富田仁「ジュール・ヴェルヌ移入考」(『佛蘭西文藝』2号 昭和52年)。
- 3) 注2)の論文では、川島の出発を明治9年11月25日としている。川島ら一行が乗船した船は米船の「シティ・オブ・ペキン」号で、この船は11月26日に横浜を抜錨し、12月12日に桑港に入港した。所要日数が16日で横浜・桑港を横断したが、これは当時としては最も短い日数である。
- 4) 注2)の論文では、川島の帰国を明治10年7月15日としている。川島が帰国の折に乗船した船はフランス郵船の「タナイス」号で、この船は明治10年7月10日香港を出航し、7月16日に横浜に入港した。
- 5) 「郵便報知新聞」明治11年6月25日、同28日号。
- 6) 「郵便報知新聞」明治13年6月28日、同7月24日、他。
「犬阪日報」明治13年7月2日～7月4日。他紙
- 7) 柳田泉「川島忠之助伝」(『明治初期翻訳文学の研究』330頁)。
- 8) 川島忠之助訳『^{新説}八十日間世界一周』(後編) 33～34頁。
- 9) 川島忠之助訳『^{新説}八十日間世界一周』(後編) 35頁。

- 10) 井上勤訳『^{通俗}八十日間世界一周』(明治21年11月刊 西村富次郎出版, 自由閣発兌) 247頁
- 11) 繁雑さを避けるために, 一広告だけにとどめる。
「L'Echo du Japon」1880. 1. 7号. この広告には, 新着図書として11点の著書が掲げられているが, ヴェルヌものが2点, ドーデものが2点掲載されている。
Verne : Les Tripulations d'un Chinois en Chine.
Verne : Les Cinq cent millions de la Bégum.
Daudet : Jack.
Daudet : Les Rois en Exile.
- 12) 「郵便報知新聞」明治15年9月11日, 9月22日, 10月19日。
- 13) 「郵便報知新聞」明治13年7月13日。
- 14) 「郵便報知新聞」明治16年9月29日, 10月1日, 10月2日。
- 15) 注14)に同じ。
- 16) 「郵便報知新聞」明治17年1月12日, 他。
- 17) 『^{経世}指針 鐵烈奇談』伊澤信三郎訳 3頁。明治16年12月11日刊 65銭。
- 18) 『東京大学法理文三学部一覽』一 115頁。
- 19) 「東京日々新聞」明治12年5月17日
- 20) 「郵便報知新聞」明治13年9月9日
- 21) 「郵便報知新聞」明治17年4月7日
- 22) 「郵便報知新聞」明治17年6月5日
- 23) 「自由新聞」明治16年9月27日~同10月11日
「郵便報知新聞」明治16年10月10日

明治10年代におけるフランス文学翻訳目録一覧

| 年・月 | 翻 訳 題 目 | 訳 者 名 | 原作者名 | 発 行 (兌) 所 | 備 考 |
|-------|--------------------|---------------|---------|----------------|-------------------------------|
| 10.12 | 民 約 論 | 服 部 徳 | ル ソ ー | 有村壯一蔵版 | 10年5月版權免許 |
| 11. 6 | 新説 八十日間世界一周 | 川島忠之助 | ヴェルヌ | 丸 善・他 | 前編のみ自費出版 |
| 11. 9 | 佛國 巴里斯新繁昌記 | 丹羽純一郎 | ガリグナイ | 山中市兵衛 | 初編のみ刊 |
| 11 | へねろむ物語 | 長澤正毅 | フェヌロン | 渡 辺 温 | 未見 |
| 12. 5 | 歐洲 哲烈禍福譚 小説 | 宮島春松 | フェヌロン | 大盛堂 宇 敷 則 昭 | 巻8まで現存 |
| 12. 5 | 西洋滑稽三笑人 | 山田 保 | ポールドコック | 山 田 保 | 17年再版 |
| 13. 3 | 九十七時 二十分間 月世界旅行 | 井上 勤 | ヴェルヌ | 大阪・二書樓 | 小冊10編にて刊 |
| 13. 6 | 新説 八十日間世界一周 | 川島忠之助 | ヴェルヌ | 慶応義塾出版社 | 後編 |
| 13. 9 | 日 本 美 談 | 前田正名 | | 北 島 | |
| 13.12 | 二萬里海底旅行 | 鈴木梅太郎 | ヴェルヌ | 京都・山 本 | |
| 14. 2 | 佛國 五九節操史 情話 | 松岡亀雄 | デュマ | 山梨・温古書堂 | 3編まで刊 |
| 14 | 地 中 紀 行 | 織田信義 | ヴェルヌ | 織 田 信 義 | 未刊か |
| 14 | 北 極 一 周 | 井上 勤 | ヴェルヌ | 望 月 誠 | 未刊か |
| 14 | 伯 爾 土 姿 繪 | 水谷由章 | リシュブールグ | 岩永才八郎 | 未刊か |
| 15. 6 | 西の洋血潮の暴風 | 百華園主人 | デュマ | 自 由 新 聞 | 15. 6. 25~15. 7. 26 紙上に連載 |
| 15. 7 | 千萬 星世界旅行 無量 | 貫名駿一 | ヴェルヌ | 山中市兵衛 | 第1編のみ刊 |
| 15. 8 | 自 由 の 凱 歌 | 夢柳狂士 | デュマ | 自 由 新 聞 | 15. 8. 12~15. 12. 24 紙上に連載 |
| 15. 9 | 虚無党退治奇談全 | 川島忠之助 | ヴェルニエ | 慶応義塾出版社 | |
| 15.10 | 佛蘭西 自由の凱歌 革命記 | 宮崎富要 | デュマ | 絵入自由新聞社 | 12月に2編刊 3編は未刊 |
| 15.10 | 民 約 訳 解 | 中江兆民 | ル ソ ー | 仏学塾出版局 | 「欧米政理叢談」 に連載 |
| 15.11 | 革命 勇婦 餘聞 テレーズの伝 | 河津祐之 小宮山天香 | シャトリアン | 日本 立憲政党新聞 | 15. 11. 5~15. 12. 10 紙上に連載 |

| 年・月 | 翻 訳 題 目 | 訳 者 名 | 原作者名 | 発 行 (兌) 所 | 備 考 |
|-------|-----------------------|----------------------|--------------|--------------------|----------------------------|
| 15.12 | 佛国革命 西洋 命起源 血潮小暴風 | 桜田百衛 | デュマ | 絵入自由出版社 | 第1編にて発禁 |
| 15.12 | 自由の恢復—一名 壓制政府の顛覆 | 潤松晚翠 | ド・ ジェルヴィル | 政 理 叢 談 | 「政理叢談」 7号～9号に連載 |
| 16. 2 | 民 約 論 覆 義 | 原 田 潜 | ル ソ ー | 春 陽 堂 | |
| 16. 8 | 非 開 化 論 (上節) | 中 江 篤 介 | ル ソ ー | 日 本 出 版 会 社 | 下節は17年刊 |
| 16. 9 | 五洲利州五日間 加内地 空中旅行 | 井 上 勤 | ヴェルヌ | 絵入自由出版社 | 巻1は16.9～ 巻7は17.2刊 |
| 16.11 | 維 氏 美 學 | 中 江 篤 介 野 村 泰 亨 | ヴェロン | 文 部 省 | |
| 16.12 | 經世指針 鐵 烈 奇 談 | 伊澤信三郎 | フェヌロン | 丸 善 商 社 | 6編以降は未刊 |
| 16.12 | 開卷驚奇 第二十世紀 驚 未 來 誌 | 富田兼二郎 酒 卷 邦 助 | ロビダー | 稲 田 佐 兵 衛 | 巻1のみ刊 |
| 16 | 魯 曹 自 叙 詳 伝 | 栗原亮一 | ル ソ ー | 書 物 出 版 所 | 未刊か |
| 16 | 蘆 騷 氏 懺 悔 紀 事 | 小野衛門太 | ル ソ ー | 博 聞 社 | 未刊か |
| 17. 6 | 月 世 界 一 周 | 井 上 勤 | ヴェルヌ | 博 聞 社 | 16年7月版權免許 |
| 17. 5 | 佛蘭西 鮮 血 の 花 太平記 | 宮崎夢柳 | デュマ | 自 由 燈 | 17.5.11～17.9.23 紙上に連載 |
| 17. 6 | 西 洋 滑 稽 三 笑 人 | 山 田 保 | ポールドコック | 早 川 新 三 郎 | 12年の再版 |
| 17. 7 | 巴 里 情 話 椿 の 倂 | 草廼戸主人 | デュマ | 静岡・函右日報 | 17.7.3～17.9.10 『椿姫』の部分訳 |
| 17. 7 | 佛 國 修 羅 の 衢 革命 | 紫 瀾 漁 長 | ユ ゴ ー | 自 由 新 聞 | 17.7.9～17.12.12 紙上に連載 |
| 17. 8 | 非 開 化 論 (下節) | 土居言太郎 | ル ソ ー | 日 本 出 版 会 社 | 上節は16年刊 |
| 17. 8 | 英 國 太 難 船 日 記 政大臣 | 井 上 勤 | ヴェルヌ | 絵入自由出版社 | 巻2は9月刊, 巻3は未刊 |
| 17.10 | 五 大 洲 海 底 旅 行 | 太 平 三 次 | ヴェルヌ | 太 平 三 次 ・ 四 通 社 | 下編は18.3刊 別注2 |
| 17.10 | 白 露 革 命 外 傳 自 由 廼 征 矢 | 井 上 勤 | ヴェルヌ | 絵入自由出版社 | 20年「佳人之血涙」 と改題 |
| 17.11 | 六 萬 英 里 海 底 紀 行 | 井 上 勤 | ヴェルヌ | 博 聞 社 | 17年2月版權免許 |
| 18. 1 | 拍 案 奇 地 底 旅 行 | 三木愛花 (貞一) 高須治助 | ヴェルヌ | 九 春 社 (堂) | 第1～19回までの 訳 |

明治初期におけるフランス文学の移入

| 年・月 | 翻訳題目 | 訳者名 | 原作者名 | 発行(兌)所 | 備考 |
|-------|----------------------|----------------|------------|--------------|-------------------------------------|
| 18. 2 | 情態人七癖 奇話 | 二愛亭花實 淡々亭如水 | シ ユ ー | 稽 古 堂 | 『七大罪』の 「吝嗇篇」訳 |
| 18. 3 | 新篇黄昏日記 | 天香道人 醒々居士 | デ ュ マ | 大阪・駸々堂 | 『椿姫』の翻案 |
| 18. 3 | 五大洲中 海底旅行 | 太平三次 | ヴェルヌ | 起 業 館 | 17年の下編 合本は19年刊 |
| 18.11 | 佛蘭 餘聞 霜夜の月 | 無 署 名 | ユ ゴ ー | 自 由 燈 | 『九十三年』の訳 18.11.18~18.12.29 |
| 19. 1 | 鍛 鐵 場 の 主 人 | 聯画閑人 | オ ネ ー | 読 売 新 聞 | 19. 1. 4~19. 3. 20 の連載 |
| 19. 5 | 修羅 浮世 鍛 鐵 場 主 | 加藤紫芳 (瓢乎) | オ ネ ー | 大阪・日野商店 | 上を一冊にしたもの、 別注5 |
| 19. 4 | 亜非利加内地 三十五日間 空中旅行 | 井上 勤 | ヴェルヌ | 春 陽 堂 | |
| 19. 6 | 世界 進歩 第二十二世紀 | 服部誠一 | ロビダー | 大阪・ 岡田宝文館 | 20.12第2編刊 21.5第3編刊 |
| 19. 6 | 五大洲中 海底旅行完 | 太平三次 | ヴェルヌ | 覚張栄三郎 | 17, 18年の合本 |
| 19. 9 | 九十七時 二十分 月世界旅行全 | 井上 勤 | ヴェルヌ | 大阪・三木佐助 | 13年の合本, 別注6 |
| 19.10 | 拍案 驚奇 地底旅行 | 三木貞一 高須治助 | ヴェルヌ | 九 春 堂 | 18年の再版 |
| 19.10 | 西洋風 滑稽演劇 南北梅技態 | 湖 東 生 | モリエール ? | 読 賣 新 聞 | 19.10.31~19.11.23 紙上に連載 |
| 19.10 | 志 々 利 譚 | 空 々 生 | ルサージュ | 郵便報知新聞 | 19.10.29~19.11.23 紙上に連載 |
| 19.12 | 垂 天 初 影 | 宮崎夢柳 | ル ソ ー | 高知・土陽新聞 | 19.12.12~20.2.3 『コンフェション』 の初編 |

別注1: 発行地で特に記入のないものは東京を指す(除く新聞)。

別注2: 「五大洲中海底旅行」(太平訳, 辻本久兵衛出版)の表紙に明治19年6月刊行とあるが, これは20年3月発行の第3版。第4版は同名で明治20年9月に文事堂, 市川路周より発兌された。

別注3: 一部に純文学書と言えないものも加えた年もある。

別注4: 1冊本以外の刊行年は, その第1巻目が出た年月を示した。

別注5: 『鍛鐵の主人』など異本が数種ある。

別注6: 14年6月に合本2冊本(三木美紀刊)の刊行広告あるも原本未見。